

写真と言語の往復を通して子どもたちの感性と表現力を育てる、ICTを活用した言語活動の充実を目指して

～フォトポエムの教育効果の調査と指導方法の普及～

松山市小学校情報教育研究委員会

〒790-0056
愛媛県松山市土居田町123番地3

<http://matsuyama-e-jouhouken.esnet.ed.jp/>

1. 研究の背景

平成 22 年度から松山市の小学校教員を中心として、写真と言葉を組み合わせた「フォトポエム」という詩の表現活動の実践研究を積み重ねてきた。フォトポエムは、写真と言語の往復を通して、児童の感性や表現力を高めることをねらいとしている。

H25 年 12 月に松山市 4 校の児童 (3～6 年生) 計 67 名にフォトポエムに関するアンケート調査を実施した。その結果、フォトポエムによる創作活動が、児童の表現に対する意欲や関心を高め、表現力の育成に効果的であることが分かった。

フォトポエムの創作には、「写真を撮影する場面」「詩の創作の場面」「デザインする (コンピュータで写真に詩を入力することに関する) 場面」の大きく 3 つの活動場面がある。児童は、どの活動場面にこだわりをもち、感性や表現力を高めているのかは明らかになっていない。フォトポエムの指導方法をより効果的なものにしていくために、この 3 つの場面での児童の意識を調査する必要があると考えた。

また、フォトポエムの実践を広めるために、毎年、研修会を実施したり、フォトポエムのコンテストを開催したりしてきた。さらに、地域ケーブルテレビでのコンテスト入選作品の番組放映を行うなどしてきたことにより、松山市内でのフォトポエムの認知度は高まってきている。今後、これらの活動をより充実したものにしていくことも大切であると考えた。

2. 研究の目的

フォトポエムの創作活動の「写真撮影の場面」「詩の創作の場面」「デザインする場面」において、児童がどのような意識で取り組んでいるか明らかにしていく。児童が、どの活動場面にこだわりをもち、写真と言語を往復させながら、表現を工夫していったのかを探っていく。また、実践事例研究をしたり、より多くの研修会を開催したりすることによって、より効果的な指導法を普及していく。

これらの活動を実践していくことで、子どもたちの感性や表現力を高めるフォトポエムの指導方法をより高め、子どもたちの言語活動を充実させることができるのではないかと考える。

3. 研究の方法

(1) フォトポエムの創作過程における児童の意識に関するアンケート調査

- ・ 平成 25 年度のアンケートを基に、調査項目を検討してアンケートの作成
- ・ 松山市小学校情報教育研究委員会情報リテラシー部メンバーを中心として、アンケート調査の実施

- ・ アンケートの結果の分析
- (2) フォトポエムの普及に関する取り組み
- ・ 松山市内の小中学校教員を対象としたワークショップ、研修会を実施
 - ・ 第5回フォトポエムコンテストの実施及び地域ケーブルテレビによるコンテスト入賞作品の放映

4. 研究の内容・経過

(1) フォトポエムの創作過程における児童の意識に関するアンケート調査

① アンケート集計結果1

松山市 11 校及び金沢市 1 校の小学 3 年～6 年生の児童 417 名を対象に、11 月 15 日～12 月 15 日の期間にアンケート調査を実施した。(1)～(24)の内容、及び、「みんなに見てほしいところ」の全 25 項目のアンケートを実施した。調査の結果は下記の通りである。

<写真を撮影する場面>

| | そう思う (%) | 少しそう思う (%) | あまりそう思 わない (%) | そう思わない (%) |
|---------------------------|-------------|---------------|-------------------|---------------|
| 1 何を撮るかよく考えた。 | 58.6 | 30.8 | 6.7 | 3.9 |
| 2 きれいな写真を撮ろうと思った。 | 66.3 | 19.8 | 10.4 | 3.6 |
| 3 おもしろい写真を撮ろうと思った。 | 28 | 31.1 | 24.6 | 16.4 |
| 4 どのような向きで写真を撮ろうかとよく考えた。 | 43.4 | 28 | 15.2 | 13.5 |
| 5 どのような大きさで写真を撮ろうかとよく考えた。 | 42.7 | 31.8 | 15.7 | 9.9 |
| 6 写真を撮る物の気持ちをよく考えた。 | 33.3 | 33.5 | 21 | 12.3 |
| 7 お気に入りの写真を撮ることができた。 | 67 | 20 | 8.2 | 4.8 |
| 8 どの写真を作品に使うかよく考えて選んだ。 | 59 | 22.2 | 10.8 | 8 |
| 9 どんな詩がいいか考えながら撮った。 | 54.7 | 24.6 | 12 | 8.7 |

<詩の創作の場面>

| | そう思う (%) | 少しそう思う (%) | あまりそう思 わない (%) | そう思わない (%) |
|-------------------------|-------------|---------------|-------------------|---------------|
| 10 写真に写っている物の気持ちをよく考えた。 | 47.7 | 28 | 17.1 | 7.2 |
| 11 写真に合う言葉をよく考えた。 | 65.5 | 21.7 | 8.7 | 4.1 |
| 12 詩の書き方を工夫した。 | 44.6 | 32.8 | 16.9 | 5.8 |
| 13 自分の詩はうまく書けた。 | 42.2 | 34.2 | 15.4 | 8 |
| 14 写真を取り替えようと思った。 | 10.8 | 12.3 | 16.1 | 60.7 |

<デザインに関する場面>

| | そう思う (%) | 少しそう思う (%) | あまりそう思 わない (%) | そう思わない (%) |
|---------------------|-------------|---------------|-------------------|---------------|
| 15 字の色を工夫した。 | 66.5 | 18.8 | 7.7 | 7 |
| 16 字の大きさを工夫した。 | 55.9 | 24.3 | 11.3 | 8.2 |
| 17 字や写真の位置を工夫した。 | 59.8 | 24.3 | 10.1 | 5.8 |
| 18 文字の色や大きさはうまくできた。 | 60.2 | 26.3 | 9.9 | 3.6 |
| 19 文字や写真の配置はうまくできた。 | 58.8 | 27 | 8.2 | 6 |
| 20 写真を取り替えようと思った。 | 11.1 | 9.9 | 16.9 | 62.2 |
| 21 詩を書き直そうと思った。 | 17.1 | 10.4 | 16.4 | 56.1 |

<全体を通して>

| | そう思う (%) | 少しそう思う (%) | あまりそう思わ ない (%) | そう思わない (%) |
|-----------------------|-------------|---------------|-------------------|---------------|
| 22 フォトポエムは作りやすかった。 | 46.5 | 29.6 | 15.7 | 8.2 |
| 23 フォトポエムを作ることは楽しかった。 | 78.1 | 12.8 | 5.3 | 3.9 |
| 24 自分の作品はよくできた。 | 49.9 | 31.6 | 12 | 6.5 |

<みんなに見てほしいところに関する質問>

| | 写真 (%) | 詩 (%) | デザイン (%) | その他 (%) |
|---------------------|-----------|----------|-------------|------------|
| 25 みんなに見てもらいたいところは？ | 37.8 | 31.7 | 25.2 | 5.3 |

※ 「①写真②詩③パソコンでの文字の並べ方④その他」を割合で示すとどれくらいになるかで児童に質問した。

調査結果から、フォトポエムのそれぞれの活動場面での児童の意識が明らかになった。フォトポエムの3つの活動場面の思考や満足度に関する項目を見ていく。

写真撮影の場面では、約90%の児童が何らかの視点をもちながら撮影していた。約80%の児童が、詩の内容を考えながら写真撮影をしていた。87%の児童が自分の撮影した写真に満足していた。詩の創作の場面では、87%の児童が、写真に合う言葉をよく考えて作成していた。76%の児童が、自分の詩がうまくできたと考えていた。デザインに関する場面では、80%~90%の児童が、文字の色や大きさ、配置について考え工夫していた。また、86%の児童が、デザイン面で満足感を得ていた。この様に、それぞれの活動の場面で、児童はイメージを膨らませたり、言葉を吟味したりし、思考しながら活動していること、それぞれの活動で高い満足感を感じていることが分かった。

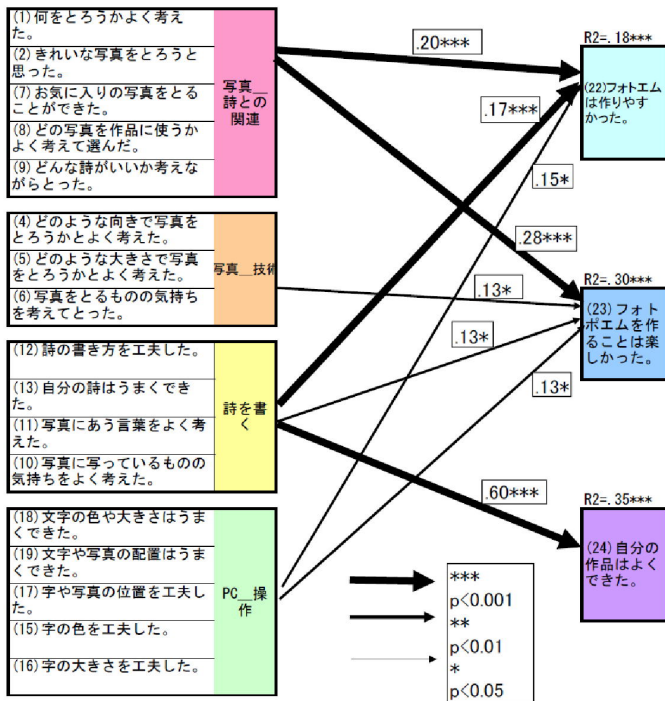
フォトポエムに全体に関する質問では、91%の児童がフォトポエム作りは楽しかったと感じていた。過去のアンケート調査も同様の結果であり、児童の表現に対する興味・関心を高めたり、表現の楽しさを味わわせたりするのに、非常に有効な教材であることが分かる。また、82%の児童が、自分の作品はよくできていると満足していることも分かった。これらのことから、フォトポエムは、児童の表現に対する自信や自己肯定感を高めることにも、非常に効果的であることがいえる。

② アンケート集計結果 2—重回帰分析の結果—

フォトポエムの指導を行っている教師は、児童が「こだわり」をもってフォトポエムを創作していると考えている。そこで、児童の「こだわり」を『他者に見てほしい・評価してほしいところ』と定義し、児童には「みんなに見てほしいところ」という形で質問した。結果は、若干、写真の数値が高かったものの、同じくらいの割合となり、写真、詩、デザイン面で大きな差異は現れなかった。

次に、「写真」「詩」「パソコン」の各項目間の関係を探るために、クラスター分析（平方ユークリッド距離 ウォード法）を施した。「写真」の項目については、質問「1、2、7、8、9」を第1クラス「写真_詩との関連」。「質問「4、5、6」を第2クラス「写真_技術」とした。「詩」の項目については、質問「10、11、12、13」を第3クラス「詩を書く」とした。「パソコン」の項目については「15、16、17、18、19」を第4クラス「PC_操作」とした。なお質問「3、14、20、21」は、クラスター構造を探索したところ、合致しない内容なので除外した。

クラスター同士の関係を探るために、重回帰分析を施した。以下はその結果である。



写真、詩、PC の活動の各項目の合計得点と、「(22)フォトエムは作りやすかった。」「(23)フォトポエムを作ることは楽しかった。」「(24)自分の作品はよくできた。」の全体を振り返る項目の間の関係を重回帰分析（パス解析）にて分析をした。

「写真がうまく撮れた。」「詩をうまく書けていた。」「PC の操作がうまくできた。」と考えている児童ほど、「(22)フォトポエムは作りやすかった。」と答えている児童が多いことが分かる。「(23)フォトポエムを作ることは楽しかった。」と考えている児童は、どの項目からも有意なパスが出ていて、いずれの活動も楽しく取り組んでいたことが分かる。特に、写真をうまく撮れたと考えている児童ほど、その傾向が強いことが分かる。

「(24)自分の作品はよくできた。」には、詩をうまく書くことができた児童ほど自分の作品に満足していることが分かる。これを考えると「詩をうまく書く。」ということが自分の作品に自信を持たせる重要な要素であることが分かった。

次に、各項目と、「25 みんな見てほしいところはどこですか？」の幅に対して重回帰分析を施した。「みんな見てほしいところはどこですか？」の設問で「詩の割合」が多かった児童ほど「(24)自分の作品はよくできた。」と考えている児童が多いことが分かった。「詩を書く活動」に満足している児童は「詩の割合」が大きく、それにより「自分の作品はよくできた」と考えていることが分かる。

以上述べてきたことをまとめると、詩を書く活動がこのフォトポエムの重要な要素であることがわかった。そうだとすると、「写真を撮る活動」「PC を操作する活動」がどのように関わっているのかを改めて考える必要が出てくる。

(2) フォトポエムの普及に関する取り組み

① フォトポエムの研修及び普及について

今年度合計 12 回の研修会やワークショップを実施した。

○ 校内研修

フォトポエムワークショップ 松山市内 3 校

○ 研修会

フォトポエム研修会 (3 回)・香川メディア教育研修会・松山市小学校情報教育研修会・東温市情報教育視聴覚教育合同研修会・石川県星陵大学フォトポエム研修会・高知県放送・視聴覚研究大会 (フォトポエム授業・フォトポエムワークショップ)・D-project 春の公開研究会

② フォトポエムコンテストについて

フォトポエムコンテストを開催し、愛媛県・大阪府・千葉県・石川県から応募された小学生・高校生の作品を審査した。その入選した作品を愛媛県の地域ケーブルテレビで番組放映する予定である。(4 月)

③ フォトポエムの指導方法の研究について

本委員会の部員を中心にフォトポエムの活動を実践し、事例収集を行った。その中の、2 年生の国語科の「のはらうた」の取り組みを紹介する。

児童の想像を膨らませるために、図画工作科の時間に粘土で「のはらうた」のキャラクターを制作した。その粘土のキャラクターを、いろいろな場所において写真を撮影する活動をする中で、児童は、キャラクターのつぶやきを考えたり、思いを膨らませたりしていくことができた。さらに、友達の制作したキャラクターと楽しく関わる中で、キャラクターが織りなす物語を膨らませることができた。そのため、いくつかのキャラクターが関わりながら話を展開する「のはらうた」の詩がたくさん創作された。このような、なりきったり、見立てたりする活動は、低学年の児童の発達段階において、想像力を高めることに有効である。

フォトポエムの作品には、擬声語・擬態語が多く使われている。この擬声語・擬態語は感性言語といわれている。感性言語は、主観的な感性経験であり感覚の質感を表したり、身体性を介した感覚や感情・情動の運動的表現の様式を表したりする言葉である。感性言語を使うことにより、読み手の感情や感覚を呼び起こし、写真からのメッセージをより鮮明に伝えることができると考える。コンテストの入賞作品の多くの作品に擬態語・擬声語が使われていることから、フォトポエムの表現技法として効果的な技法であると考えられる。

5. 研究の成果

今回の調査で、改めてフォトポエムの教育的効果の高さを立証することができた。特に、フォトポエムの活動を通して楽しく表現活動を行うなど、表現に対する関心・意欲の向上について非常に高い効果があることが分かった。国語科の学習指導要領の言語活動例には、詩の学習について、「児童の思いを大切に創造的な表現をすることの楽しさを実感させることが大切である。」とあり、学習指導要領との内容とも合致している。

写真を撮影する場面では、イメージを膨らませたり、見方を変えようと試みたりしている。詩を創作する場面では、写真に合う言葉を考えている。デザインの場面では、デザインから伝わる印象を考えている。このように、どの活動場面でも、児童は思考しながらフォトポエムの制作を行っていることが分かる。さらに、重回帰分析により、詩がうまく書けたことと、作品についての満足度の相関関係が高いことも分かった。

6. 今後の課題・展望

詩がうまく書けたことと、作品についての満足度の相関関係が高いことは分かったが、フォトポエムの満足度に「写真を撮影する場面」「デザインする活動」がどのように関わっているのか引き続き調査していく必要がある。児童の感想を見てみると、「悩んだ」という言葉がでてくる。この悩みは、自分の思いを伝えようと試行錯誤している姿の表れであることが、児童の感想から読み取れる。この「悩み」と満足感・達成感の相関関係についても調査していきたい。さらに、児童の個の変容を見取る活動を通して、児童の感性や表現力の高まりを検証していきたい。

また、教師がどのような指導を行ってきたのかを調査し、教師が設定したテーマや行ってきた指導方法と、児童の意識の変化との相関性も調査し、より効果的な指導方法を確立するとともに、評価規準を明確にしていきたい。

7. おわりに

子どもたちの身の回りには、タブレット端末をはじめとした情報端末がこの数年で急速に普及しており、高校生にもなると、携帯電話所持率は90%を超えている。メールやSNSで日常的に情報発信する子どもたちにとって、写真と言葉を組み合わせて表現することは、ごく当たり前のことになっている。だからこそ、写真と言葉を組み合わせて表現する力は、子どもたちの生きる力の重要なスキルの一つになると考える。

今回のアンケート調査から、80%を超える児童が自分のフォトポエムの作品に対して、高い満足感をもっていることが分かった。H22年の松山市内のある小学校の6年生に対してのアンケート調査では、詩で表現することに対して苦手意識をもっている児童は、全体の87%を占めていた。このような児童が、自信をもって楽しみながら表現活動に取り組むための一助になるべく、今後もフォトポエムの活動をより多くの学校に広めていきたいと考える。

< 参考文献 >

- ・現代の認知心理学1 知覚と感性 北大路書房